

第 55 回プリマーテス研究会

# 美しい東南アジアの自然

—そこではぐくまれてきたものたち—

場所： 日本モンキーセンター

内ビジターセンターホール

日程： 2010年11月27日(土)・28日(日)

## ープログラムー

11月27日(土)

12:00-13:00 受付

13:00-13:10 挨拶

西田利貞 (日本モンキーセンター)

13:10-14:00 「東南アジアの熱帯林がはぐくむ生物多様性」

沼田真也 (首都大学東京)

14:00-14:50 「東南アジアの熱帯林の保全・保護」

川上豊幸 (熱帯林行動ネットワーク)

14:50-15:20 休憩

15:20-16:10 「オランウータンの生態と保護活動」

山崎彩夏 (東京農工大学)

16:10-17:00 「テングザルの生態を追って：テングザルの森に何が？」

松田一希 (京都大学霊長類研究所)

17:30-19:30 懇親会 (参加費 2000 円)

11月28日(日)

10:00-10:30 受付

10:30-11:20 「サルのいる風景 —アジアの野外調査から—」

川本芳 (京都大学霊長類研究所)

11:20-12:10 「病気から見たサルたちとヒトの関係」

後藤俊二 (麻布大学)

12:10-13:00 総合討論

## －開催趣旨－

東南アジアの熱帯林は生物多様性豊かな地域として知られています。今回は植物相と動物相に詳しいそれぞれの専門家をお招きし、その魅力を再認識したいとおもいます。霊長類も、その生物多様性を形成する重要な一員です。東南アジアには実に多くの霊長類が生息します。元来、アジアの人々はサルとうまく共存してきました。しかし、近年、人間活動が彼らの生息域をいちじるしく劣化させてきました。本研究会は、生態系の持続性を願って、東南アジアの自然を見つめる機会にしたいと思います。

## －発表要旨－

### 東南アジアの熱帯林がはぐくむ生物多様性

沼田 真也

首都大学東京・都市環境科学研究科

東南アジアの熱帯林はインドネシア、マレーシアを中心にした島嶼部とユーラシア大陸の一部に広がり、時に樹高 70m を超えるような巨大な樹木が見られる森林に様々な生き物たちが生息している。この地域の熱帯林には、日本でもラワン材やメランティ材として馴染みが深いフタバガキ科 (Dipterocarpaceae) の樹木が広く分布していることが特徴で、他の地域では見られない極めてユニークな現象を見ることができる。その現象は一斉開花 (general flowering) と呼ばれ、フタバガキ科を中心とした様々な分類群の植物が、数年に一度の間隔で同調的に開花、結実するものである。同種の植物が同調的に繁殖するような現象は世界中の様々な地域で見ることができるが、様々な植物種の繁殖が超年的に同調するという点で、東南アジアの一斉開花は極めて独特なものであり、このような植物の繁殖リズムが東南アジア熱帯林の生物多様性と深く関連していると考えられている。今回は、東南アジアでしか見られない一斉開花現象について触れながら、東南アジアの熱帯林がはぐくんできた生物多様性について紹介したい。

## 東南アジアの熱帯林の保全・保護

川上 豊幸

熱帯林行動ネットワーク

現在、インドネシアやマレーシアでは、家具や住宅や建設用などの木材利用のための伐採のみならず、オイルパーム農地開発や紙原料のための産業植林開発が行われています。紙原料生産においては、まず天然林の皆伐を行い、これを原料として利用した上で、外来種のアカシアの単一人工林を造成しており、天然林減少を引き起こしています。こうした森林減少は生態系を破壊して、スマトラのゾウやトラ、オランウータン等の生息地が縮小し、絶滅が危惧される状況に陥っています。これら問題のある紙がコピー用紙として広く販売されており、ノートやティッシュなども販売されてきています。現地 NGO からは問題のある製品を避けるよう要請が行われており、消費量を削減し、FSC 認証紙や FSC 認証材、古紙 100%再生紙を選ぶことで保全・保護に貢献できます。

## マレーシア・サバ州ダナンバレー保護区における

### ボルネオオランウータン調査

山崎 彩夏

東京農工大学・連合農学研究科

日本学術振興会

オランウータンは東南アジアに生息する唯一の大型類人猿である。また熱帯雨林の生態系の中では、現存する最大の樹上性動物であり、生態系を支えるキーストーン種であるとされる。しかし、近年、大規模プランテーションの拡大や商業伐採によって、その生息域は急速に分断化および消失しつつあり、オランウータンの生息数は、ボルネオオランウータン 54000 個体、スマトラオランウータン 6500 個体と減少の一途を辿っている。そのために、効果的な保全の基盤となるような基礎研究と応用研究の双方が求められている。本講演では、ボ

ボルネオオランウータンを対象としてマレーシア国サバ州北東部のダナムバレー森林保護区内でおこなっているフィールド研究の様子について紹介する。同保護区は、マレーシア国領内のオランウータンの調査地としては、唯一の原生林であり、その他の二次林や植林地との調査データの比較は、今後のオランウータンの保全に有用な知見をもたらすと考えられる。それとともに、リハビリテーション事業なども含めたオランウータンの保全をとりまく諸状況についても報告したい。

## テングザルの生態を追って：テングザルの森に何が？

松田 一希

京都大学・霊長類研究所

ボルネオ島の固有種であるテングザルは、島を流れる川沿いの密林に暮らしている。川沿いの森はぬかるみが酷く、容易に人が侵入できないことから、従来のテングザル研究は、朝夕の限られた時間に水上のボートから観察するという手法が主流であった。これは、このサルが夕方になると必ず川沿いの木で眠るという習性を利用したものである。しかしこの方法では、テングザルが昼間に川岸から離れた森の中で何を食べ、どのように動いているのかを知ることはできず、彼らの昼間の生態は謎に包まれていた。そこで演者は、テングザルの暮らす森へ分け入り、彼らの行動の終日観察を試み、1年間に延べ3,000時間に及ぶ観察に成功した。本講演では、テングザルと一日中森で過ごして見えてきた、彼らの興味深い生態を中心に話を進める。動物の基礎生態の研究というのは、一見するとただの趣味のようにも思われるかもしれない。しかし、人間活動が活発化するにつれ生息地が減少し、絶滅の危機に瀕しているボルネオ島の動物が、何を食べてどのように生活しているのかを知ることは、動物たちの暮らしを守るための森林保護計画の要でもある重要なアプローチだ。テングザルの生態を追うことは、すなわちボルネオの森を守ることに繋がっているのだ。

## サルのいる風景 —アジアの野外調査から—

川本 芳

京都大学・霊長類研究所

私はサルたちの生態や進化を知りたくて野外で遺伝子の調査を続けています。これまで、ニホンザルやその近縁種の生息地を訪ねながら、さまざまな風景を見てきました。地域や国が違っていると、サルと人との関係も多様で、共存や共生の形が異なるため、考えさせられることもしばしばです。今回の発表では、サルと人の関係を考えるため、アジアの野外調査で印象に残った風景から以下の3つを紹介します。

(1) コメンサリズムの背景：バングラデシュ都市部のサルたち

(2) 仏教国の悩み：タイとブータンに見るサルとの共存の模索

(3) 消え行く民間信仰：日本の尻猿（うまやざる）

(1) ではサルたちのしたたかさ（雑草性）やコメンサリズム（偏利共生／住家性）について、(2) では共存に関わる宗教性と生活規範について、(3) では民俗共生と日本人の時代的变化について、考えたいと思います。

## 病気から見たサルたちとヒトの関係

後藤 俊二

麻布大学

今回のテーマは「美しい東南アジアの自然－そこではぐくまれてきたものたち－」というのですが、私に与えられたテーマは病気に関するもので、少々メインテーマにそぐわないような気がしますが、ヒトとサルたちの関係・接触という側面からは、避けて通れない課題でもあります。我が国や東南アジアの各国で、サルたちとヒトの社会活動の接近や軋轢に起因するトラブルが少なくありません。

さて、サル類・類人猿達には我々ヒトでも見られるような様々な疾患が発生します。糖尿病や精神障害など、人で見られる病気の殆どがサル類でも発生す

る、と言ってもよいでしょう。また、他の動物には見られないが、ヒトとサル類の生理・構造の共通性に起因するサル類とヒトにのみ共通する疾患や、飼育下の動物に発生し、野生個体では発生しないであろうと考えられる病気もあります。

ここでは幾つかのサル類の病気について紹介し、また、特に今後も大きな課題となるサル-ヒト共通感染症について概説したいと思います。